

「プロフェッショナル、エキスパート、 スペシャリスト」

坂口 雅樹^E

妙な予感

まさか、このようなことになるとは思わなかった。ことの起こりは、数年前に遡る。それは私が参考室に残してきた、一枚の参考質問表にある。「プロフェッショナルとエキスパート、スペシャリストの意味の違いを調べて欲しい」と…。今にして思い起こせばいやな予感があった。ことばの本来の意味を探すだけでよいのか。質問依頼者の意図は、…それは口に出すほどに息苦しく感じられる言葉、「図書館専門職」。語源の解説をしてもしかたがない。参考係ならば、すぐにでもあたって調べなければならぬ典拠資料・OEDも素通りした。私たちの頭のなかで、打てば太鼓のように響きわたるイメージを大事にしたらどうなるのか。そう考えてみても、どれもこれも「専門」ということばからは一步も前へ進めない。似たもの同士のようにみえても、おそらくは素材が違うのであろう。どのように料理すればうまい味になるのか。図書館の中でも語学に疎い部類にはいる私は、はたと困ってしまった。明確な回答もせずして、3年前にすごすごと、後味の悪い思いをして参考係をやめた。もうちょっと前に参考質問をしてくれたならば、前任者で英語に卓越した才能をもった先輩がいたのに、と悔やみもした。この参考質問をしてくれた、いまはもう図書館を去ってしまった某先輩のことを、ときおり思い出しては、ちょっとだけ文

^Eさかぐち・まさき / 図書館閲覧課

献にあたってみたこともあった。

外の世界では

会社経営におけるスペシャリストの世界では、専門職種として、技術系の専門職種と業務系の専門職種があり、技術系については図書館でも最近、システム開発・管理系の職種が定着しているので、理解の範疇には入っていた。しかし業務系については、経理、税務、法務、購買、物流、営業、企画などの専門的職種の中に、図書館司書を加えるにはどこことなくためらいがあった。たしかに、スペシャリストとして学問の主題知識を業務に生かす館員はいるが、業務系の企画スタッフとして、特定の専門的分野の立場から管理者を補佐する館員がいるのかどうか、本学独自の職格である副参事、あるいはそれ以外の者が、専門能力を認められて、職位に基づいて管理者を補佐しているのかどうか、私の目では判らなかつたからである。

大学図書館では

図書館員、とりわけ大学図書館員であるためには通例、いくつかの資質が求められる。まずは資格であるが、司書資格の履修課程というのは公共図書館員の育成を念頭においたものであり、大学図書館員が専門的業務を遂行するには、この講座内容だけでは不十分であると思われる。近年流行の、情報 **LITERACY**（利活用能力）を加えたとしても、大学図書館員の資質としては十分とはいえない。偉そうないいまわしで恐縮ではあるが、私流にひとことで表すと、学術情報を高度に使いこなせる、あるいは上手に利活用できる資質、これが大学図書館員の理想とする姿ではなかろうか。学部において主題分野に関する知識を学び、大学院にて図書館・情報学を修めた者が、サービス現場の感覚を養いながら知識をさらに涵養して実践していくのが大学図書館員に相応しいのかもしれない。しかし、ありもしないこのようなケースを引き合いにだして、何の意味があるのであろうか。

理想と現実

研究分野に関する主題知識、図書館・情報学の知識、書誌活用能力、国際的に通用する語学力、情報利活用能力、利用者対応コミュニケーション能力。これらはすべて一つの目的に導く「道具箱」である。元来、図書館員が書物を終極の対象とするのではなく、利用者という「人」を対象とした奉仕活動を行う者であるならば、プロのエキスパートあるいはスペシャリストとは、己が道具箱の中から熟達した「道具類」を取り出して、利用者の目の前において繰り広げていくナビゲーターの役割を演ずる者である。ではプロフェッショナルになるにはどうしたらよいか。わが大学の図書館職員はすべて一般事務職である。図書館司書職というのではない。司書資格を修得したからといって図書館のプロフェッショナルと呼ばれることもない。司書資格がなくとも図書館で経験 (experience) を積んでエキスパートとなり、ある分野のスペシャリストとなることもできる。これが実態である。だから考えても無意味のような気がして、考えたくはなかった。このような「道具類」を羅列したところで、専門職も、プロフェッショナルも、エキスパートも、そしてスペシャリストも、言葉遊びのようで、つまらなく思えてきた。そして時間がたつにつれて、参考室に置き忘れてきた「贈り物」も、いつのまにか忘れてしまっていた。

ハプニングが起こった

ところがある日、とんでもないものに出会った。装備中の新刊図書の中に気になる背表紙があった。「図書館員のための生涯学習概論 / 朝比奈大 著作 JLA 1998」。生涯学習という言葉にちょっと導かれてページをめくると、あったあった。夢から覚めて、すぐさま参考室めがけて走りだした。探すは数年前の参考質問表。忘れ物をやっと取り出し、答えになる部分のコピーを添えて、質問者である某先輩に送った。その 24 章「生涯学習時代の図書館員の資質」には、専門職 (profession) としての司書、専門家 (expert) としての図書館員、主題専門家 (subject specialist) としての図書館員、という項目がほぼ 3 ページにわたって書かれていた。professional

とは専門職者であり、図書館員（司書）はこれにもっともふさわしい職であるということ、ただし単なる専門家のことではないということ。そういえば参考係に、ある学問分野の専門家（スペシャリスト）を配置してはどうかという話があったが、図書館がこの話に乗っていなかったわけというものがやっと呑み込めた。

プロフェッショナルとは

この本文から引用すると、\ただし、間違えないでほしい。専門職者とは単なる専門家のことではない。古典的な意味では、専門職とは聖職、医師、弁護士の三つの職業に限って用いられることばであった。**profess** とはもともと（自己の信仰を）告白するという意味のことばであり、現在では広く、主張する、明言するなどという意味で用いられている。だから **profess** する者が **professor**（教授）であり、大学教授は研究者として「私はこう思う」ということを公言すべき職である。これに対して **profess** を受ける者が **professional** であり、その職業が **profession** と呼ばれるものである。間違えないでほしいと言ったのはこの点である。専門職者とはまず何をおいても、不特定多数の人のさまざまな、＜悩み＞を打ち明けられ、それを聞き取って相談にのり、そのうえで自らの専門的立場からの適切な助言を与え、＜その人＞の悩みの解決のために全力を尽くすことを自らの使命とする職業人なのである。”この一文を読んで、私は司書というものを見直す気になった。

スタートラインに立って

私は誤解していたのかもしれない。それは、図書館員が司書資格を得ることが容易であるがゆえの誤解であったと思う。司書資格ぐらいで専門職といえるのかと。だがその思いはわずかながら薄れかけている。司書の範疇と図書館員の範疇は違う。司書はプロフェッショナルであるがゆえにエキスパートを目指す宿命を背負っているのにたいして、他の図書館員は一般事務職としてエキスパートを目指す存在である。だから司書資格は

図書館のプロフェッショナルとして生きていこうとする決意、たとえばほんの一里塚にすぎないといえる。埃にまみれた長い道のりを走りぬく、スタートラインに立ったと思えばよい。そして司書のほうが常にリードしてゴールラインを駆け抜けて欲しい。それには勇気をだして、専門職者に求められる第一の条件をクリアすることが大事である。それはおそらく、人格者になるための教養を身につけ、学問を志し、来館した利用者・学習者と上手にコミュニケーションがとれるように、努力することであろう。専門職者（司書）は、努力家であって欲しい。そしてゆくゆくは図書館業務・サービスの全容を理解し、経験を生かして利用者に対して図書館の総合的な案内、ガイダンス、レファレンスができるようになって欲しい。新入生オリエンテーションの舞台で、図書館に足をはこぶ楽しさを、図書館のプロであるがゆえに、身をもって演じるのがよい。

エキスパートとは

図書館のプロを自認するならば、それは図書館・情報学のエキスパートであるということである。本文からさらに引用すると、\医師にとっての医学、弁護士にとっての法律学に相当するものが司書にとっての図書館学である。図書館学の中核をなすものは図書館資料についての研究である。〔中略〕いずれにせよ、図書館員は資料と情報とに関する広範な専門的知識を持っていなければならない。あらゆる分野における資料について、その生産と流通と利用のされ方の全体を知っていなければならない。”気が重くなる言葉である。司書講習を一年あまり毎晩のように受けたとはいえ、それは受講者であり、学習者であっただけのこと。図書館学を専攻する学者であっただけでは決してなかった。

砂の城

図書館のエキスパートになるとは、図書館業務”に熟達することであり、図書館学のエキスパートになるなどとは、夢にも思っていなかった。だから図書館業務に関わる周辺領域を意識的に学習してきたつもりであ

る。そこでやってきたことといえば、図書分類法・目録法の勉強。わずかながらの参考調査法の閲読。そのための外国語の学習であった。資料組織法を学問的に研究して論文を発表することなど、現場の図書館司書の仕事ではないと思っていた。この一文を読んでいくうちに寂しさがこみあげてきた。二十数年にわたって築き上げてきた城が、砂の城でしかなかったのかと。いまさらもう後戻りはできまい。中国の図書館から受け入れた図書館研修生が、図書館学の論文を書いて専門誌に発表しているという。何のために書くのだろうか。エキスパートになるために書くのであろうか。教育学が教育現場を实践の場とする学問であるのと同様に、図書館・情報学は図書館現場のためにある学問である。だから、図書館司書は「学」を意識するのであろうか。

図書館が輝くとき

図書館には明暗がある。図書館サービスカウンターが「明」であるならば、中央図書館地下3階の地中深く埋まった所は、「暗」の部分である。太陽の光のない空間に、本はぎっしりと、せめぎあいながらたたずんでいる。私たちは本の声を聞きながら、せっせと書架の整備をおこなっている。書庫出納サービス業務の合間ですら、時間のある時には書架の移動、本の棲み分け、目録カードの仕分け、図書の背ラベル打ち。砧を打つようにしんとラベル打ちの音がする。そしてサービスカウンターからけたたましく落ちてくる図書請求票の音に、利用者の存在を意識する。点と点を結ぶ行為。それは、専任職員であろうとなかろうと、司書として図書館で生活の糧を得ている者が、等しく体験し、経験（experience）を積んでいかなければならない営みである。書庫内で誰一人惰眠をむさぼる者はいない。そしてこの営みの果てに芽生えてくるものが、図書館業務のエキスパートとしての自覚である。本は物ではない。命があり、その背には顔がある。浄瑠璃の書架分類に配架されている薄汚れた和装本。普段は誰も見向きもしない本である。ある時、学生を案内して書庫内ツアーをした時に、引率の教授が立ち止まって一冊の本を開いた。「この朱の書き込みは、音楽でいえば楽譜のスコアにあたるものだよ・・・。」私は知らなかった。知ら

ないことだらけである。だからこの時から、知った顔をして、図書館のことをお話するのが億劫になった。そしてよけいに書庫業務をありがたいと思うようになった。それは書庫業務を通じて、図書館資料を知ること。日の当たる図書整理業務だけでは図書館全体の資料像を把握することはできない。ときには請求票のガツーンという音にプライドを傷つけられそうにもなるが、しかしそれだからこそ、書庫出納業務には単純業務とはいえないう一瞬の輝きがある。空調の音が風のように響きわたる時。消灯の時に、そのことを強く感じる。

スペシャリストとは

プロフェッショナルもエキスパートも、私の抱いていた思いとは、どうやら違っていたようである。ならば気を取り直して、スペシャリストに光明を見いだせるのではと、さらに主題専門家 (**subject specialist**) と題した次の文章を読んでみた。＼医師や弁護士にも、広範な全体的知識の上に、それぞれ自分の専門とする特定の<科>があるように、図書館員もそれぞれ自分の専門とする主題分野を持つべきである。〔中略〕アメリカにおいては4年制の大学を卒業した後に、いわゆる大学院コースで図書館学を学ぶのが通例になっている。＂ここでいう主題分野とはあきらかに学問分野のことである。業務の分野ではない。なるほどとはいえ、私の描いていたイメージとはまるで違っていた。話は飛躍するが、生涯学習時代に生きる図書館員の必須条件では、図書館員自身がある学問分野の＼理解者＂であり、業務に習熟しながら学問についても研鑽をかさねなさいということである。学問分野かどうかはわからないが、本学図書館員の中にも主題分野をもつ者は複数いる。大学院で博士前期課程を修了したものは、図書館学専攻のエキスパートではないが、ある主題分野のスペシャリストといえる。歴史学、地理学、経営学、文学、教育学、このほかに漢籍、古文書、書誌・書目・解題編纂というのもりっぱな専門分野である。

スペシャルとジェネラル

外国語会話能力があるというのは、おそらくスペシャルの領域に入らないであろう。スペシャル（特別）の反意語はジェネラル（全般）であり、この2語の境界領域は流動的である。公認の外国語検定で最上級がこれに次ぐレベルに達して、やっとスペシャルかといえそうになるが、でもなんとなく言い澁んでしまう。それは国境があってないような、ヨーロッパの言語事情を見聞きしているからである。二言語併用など、彼の地では珍しいことではない。周囲が外国語に堪能な者で埋まれば、スペシャルなどとはいえない。しかし、外国語文学や言語学に精通するのは、学問分野であるからして、きわめてスペシャルなことである。ところで、ジェネラリストはともかくとして、スペシャリストへの道というのは、気がついたときには場合によってはもう遅いような気がする。それはスピードスケートの500メートルのスペシャリストが、あるいは陸上の100メートルランナーが、いかに長距離を目指そうとも、体がすでに短距離向きにできているのと同じことである。生来不向きな分野でスペシャリストを志すのではなく、「私はどこから来たのか、私は何なのか」という命題を背負って生きていくことである。

生きるも死ぬも

英会話や中国語会話を身につけて図書館業務に生かす道は、おそらくエキスパートに通じる道である。expert とは文字どおり図抜けていること。他者と比較して卓越していることを指す。英会話を身につけて図書館関係のコミュニケーションがとれること。それは絶対的なことである。だから図書館司書はまず、エキスパートを目指すほうがよい。わが図書館にエキスパートがいるのかいないのか、ここではまだ言えない。しかしスペシャリストはいると断言できる。アメリカ流のスペシャリストではなくて、和製スペシャリストならばの話である。これは客観的事実である。だが、ちょっと待てよ。わが大学図書館にこのスペシャリストたちが生き生きと活躍できる受け皿があるのであろうか。大学院で究めたことがらが、

業務やサービス現場で生かされているのであろうか。

図書館の宝物

本学図書館の司書は努力家である。何人ものひとが、図書館業務に関わる専門分野の研鑽に、身銭をきって勤しんでいる。まだ2才になったばかりの幼い子を残して、朝早い通勤電車のなかで、ラテン語の文法書をひもとき、始業前までの1時間ものあいだ、事務机に座って学習している若い図書館員の姿を毎日みていると、胸にじーんとくるものがある。人に言われて始めたことではない。ましてや地位や名誉のためでもない。始業前のひとときを学習時間に費やすのは、考えに考えた末のことである。どうすれば勉強する時間を捻出することができるのか。その気持ちを支えているのは、人格者になるための強い意思である。自学自習のこころ。それは本学に脈々と流れる、尊い宝である。私はこれら、勉強家の人々を後輩にもったことを誇りに思う。そして未来に向けてこの力を受け継いでいかなければならないとも思う。

卵を選ぶ

駝鳥の卵、鶏の卵、うずらの卵。一目みれば判る卵である。これをみな同じ卵として扱い、育てる者はいない。大学として人を選ぶには、どこにどのような適性をもった人が必要なのか、採用はどうすればよいのか、一目で判らなければうそである。図書館においては近年、主題専門的知識をもった人が枯渇しているという。その情報を流すのは、図書館員の仕事であり、その意を汲むのが大学の責任である。好きこそものの上手なりというが、まず初めに好きであることが専門家育成の鍵である。いくら業務上の必要があるとはいえ、不向きな図書館員に古書・漢籍の研修をおこなったとしても、限りなく非効率に近い。図書館はスペシャリスト（主題専門家）の集まりではないが、スペシャリストを要所要所に配置しなければならない組織体であるといえる。そして配置されれば、常識のない専門家・研究者ではなく、きわめて世間常識のあるプロフェッショナル、そしてエ

キスパートとして、図書館が組織的に育成していくのが常道ではなからうか。

ゴーギャンの絵

今からおよそ 100 年前の 1897 年、Paul Gauguin はタヒチ島旅行の折りに、ある標題をモチーフとする絵を後世に残した。「D'où venons-nous? Que sommes-nous? Où allons-nous? 」である。英訳すれば「Where do we come from? What are we? Where are we going? 」つまり、「我らはどこより来たのか。我らは何なのか。我らはどこへ行くのか。」である。過去、現在、未来へのこの問いかけは、世紀末の今、重い響きを奏でている。私はかつて、本学の新入事務職員の図書館関係講師としてその任を仰せつかったことがある。そのテーマは「学術情報と図書館」であった。その時にはじめて、ゴーギャンのモチーフを使って図書館の過去・現在・未来を問うた。それはこのモチーフが図書館人をも含む、人間存在の根本的命題にかかわるような気がしたからである。図書館司書はかつて、社会的に軽んじられていた。今はどうかといえば、学校図書館の現場では司書教諭の設置義務が声高に叫ばれているが、状況は変わっていない。で、未来はどうか。大学図書館では司書に未来はあるのか。その時の私の座標軸をなしていたのは、今にして思えば、図書館員に投げかけられた 3 つの宿題の内のひとつ、エキスパートを意識してのことではなかったかと思う。

すなおな絵

図書館司書はかつてどのように扱われ、今はどのように生き、そして将来はプロとしてどのような道があるのか。これを論理的に説明するには、自分があまりにも無学であるがゆえに、きちんとした論文の形では書くことはできない。たとえ人の意見を羅列できたとしても、自分がみえてこなければ何の意味もない。学校の先生はよく、自分で見てきたような嘘をつくと、その昔、中学校の地理の先生からきいた記憶がある。私には嘘のつきようがない。だから見たこと、聞いたことならば書き記すことができ

るかもしれない。それが「プロフェッショナル、エキスパートそしてスペシャリストの違いを明らかにして欲しい。」といって、参考室に来てくれた先輩の恩に報いる道であると思う。書きすすむほどにあまりにも生々しく、痛々しく、そして誤解を招くので、書かないほうが無難なのかもしれない。だがしかし、プロフェッショナルそしてエキスパートとして現場で体を張って生きてきた、そして生きていこうとする図書館司書の実像を、いつの日か書き残すことが、司書職というものを理解する手助けになるのではないかとも思える。その画像をすなおに描けたらと思う。